九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

民間団体による野外教育・冒険教育の理念、特徴と課題

伊藤, 安浩
大分大学教育福祉科学部

洲崎, 洋昭
大分大学教育福祉科学部

軸丸, 勇士
大分大学教育福祉科学部

https://doi.org/10.15017/9083

出版情報：生活体験学習研究. 7, pp.29-38, 2007-03-31. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

日本生活体験学習学会誌　第７号　29－38（2007）

民間団体による野外教育・冒険教育の理念、特徴と課題

伊　藤　安　浩　　洲　崎　洋　昭　　軸　丸　勇　士

Idea, Characteristics, and Some Issues of Outdoor/Adventure Education Programs Practiced by Civilian Organizations

Ito　Yasuhiro・Susaki　Hiroaki・Zikumaru　Yushi

要旨　近年、野外教育・冒険教育のプログラムが、いくつかの民間団体によって実施されるようになった。その中で代表的な２つの団体が「財団法人日本アウトワード・バウンド協会」（ＯＢＳ）と「株式会社プロジェクトアドベンチャージャパン」（ＰＡＪ）である。ＯＢＳが、自然環境における一定の危険を伴う冒険活動の重要性を強調する一方で、ＰＡＪは、特に子どもや若者たちにとっては、文字通りの意味の「冒険」だけではなく、心理的な意味での「冒険」や「挑戦」も重要であると考えている。ＰＡＪのプログラムは、屋外の環境に限定されず、例えば体育館や教室などの室内でも実施される。

本稿では、具体的なプログラムやアクティビティの事例として「ＮＰＯ法人エー・ビー・シー野外教育センター」（ＡＢＣ）のそれを取り上げ、野外教育・冒険教育の理念、特徴と課題について論じる。

Abstract　In recent years, outdoor/adventure education programs have been practiced by several civilian organizations. Outward Bound School (OBS)　and Project Adventure Japan (PAJ) are two representatives among those organizations. While OBS places much emphasis on risk-taking adventure activities in natural environment, PAJ regards adventure and challenge as important not only in literary meaning but also in psychological one especially for the young. As PAJ programs are not limited to outdoor settings, they are practiced in indoors, gymnasiums or classrooms, for example.

In this article, taking programs and activities of ABC Outdoor Education Center (ABC) as a case, idea, characteristics, and some issues of outdoor/adventure education programs practiced by civilian organizations will be examined.

１．本稿の目的

野外教育・冒険教育は現在、学校、地方自治体、青少年教育施設、民間団体等によって実施されている。なかでも、野外教育・冒険教育に関する一定の実績を持つ民間団体の存在と活動は、今後いっそう重要度を増すと考えられる。なぜなら、学校、地方自治体、青少年教育施設が実施の主体であっても、実際にはそれら民間団体が実施の委託を受けていたり、活動の企画・立案・実施のノウハウを提供したりしていることが少なくないからである。現行の学習指導要領においても、2003（平成15）年12月の一部改正の際、体験的な活動や学習を重視する総合的な学習の時間の取り扱

連絡・別刷り請求先（Corresponding author）
大分大学教育福祉科学部（〒870-1192　大分市大字旦野原700番地）
Faculty of Education and Welfare Science, Oita University（700 Dannoharu, Oita City, 870-1192 Japan）

いに関して、社会教育関係団体等の各種団体との連携の必要性が新たに書き加えられている。そこで本稿では、これら民間団体による野外教育・冒険教育はどのような理念によって、また、どのような特徴を持ったプログラムによって実施されているのか、課題があるとすればそれはどのようなものかを明らかにすることを目的とする。そして、そうすることによって、様々な源流を持ちながら多様に展開されているわが国の野外教育・冒険教育の実態を捉えるための、一つの枠組みを提示したい。

野外教育・冒険教育の理念の分析のために取り上げる民間団体は、現在のわが国における２つの主要な団体と見なされる「財団法人日本アウトワード・バウンド協会」（通称ＯＢＳ）と「株式会社プロジェクトアドベンチャージャパン」（通称ＰＡＪ）である。野外教育・冒険教育の具体的な活動の分析としては、独自の問題意識に基づいて設立され、その後、それぞれ異なった特徴を持つこの２つの団体の理念に触発されながら活動を続けている大分県の「ＮＰＯ法人エー・ビー・シー野外教育センター」（通称ＡＢＣ）のそれを取り上げる。これらの分析を通して、現在実施されている野外教育･冒険教育の理念､特徴と課題を明らかにしたい。

２．用語と概念

野外教育という用語自体は以前から存在したが、それが教育施策上の用語として使用されるようになったのは、それほど古いことではない。文部省の生涯学習局青少年教育課が学識経験者等の協力を得て行った「青少年の野外教育の振興に関する調査研究」が、教育施策上の用語として「野外教育」を使用した最初の事例と見なされる。『青少年の野外教育の充実について』と題するその報告がまとめられたのは1996（平成８）年７月である。その中で野外教育は「自然の中で組織的、計画的に、一定の教育目標を持って行われる自然体験活動の総称」として捉えられており、同時に「自然体験活動を取り扱う教育領域」として位置づけられている[1]。

この野外教育については、1960年代以降、特にキャンプを活動の中心とする野外教育の文献がいくつか存在するが[2]、例えばネイチャーゲームなどを取り入れた新しいタイプの野外教育を研究対象とした文献は、現時点でほとんど存在しないと思われる。また、冒険教育についても、青少年の家など国公立の社会教育施設が刊行する報告書の類は散見されるが、それを本格的な研究対象とした文献は見当たらない。

さて、野外教育に相当する英語はoutdoor educationであるが、このoutdoor educationの概念についてアメリカのフィリス・フォード（Phyllis Ford）は、outdoor educationに関する統一された定義が存在しないこと、outdoor educationの能力や知識に関する統一された尺度も存在しないことを指摘した上で、「outdoor educationとは、野外における、野外についての、野外のための教育である」というDonaldson and Donaldson（1958）の定義を、最も実際的なものとして紹介している[3]。そしてフォードは、outdoor educationに類似する活動として「環境教育」や「野外レクリエーション」などとともに「冒険教育」（adventure education）を挙げている[4]。フォードによれば、冒険教育とは「参加者が自ら『危険』あるいはハイリスクと知覚される諸要素を作り出す諸活動」である。それらの活動は本質的に、他の誰かによって危険であると客観的に判断されるような活動では必ずしもなく、あくまで参加者によってそのように知覚される活動であり、そのことが、参加者の中に「冒険」の感覚を生み出すのだというのである。フォードは、冒険教育における活動の具体例として、有資格者の指導の下でのロープ・ワーク、ラフティング、登山、ロック・クライミングを挙げている。

以上の検討により､一定の教育的な意図に基づいて、自然の中で自然と関わりながら行われる各種の自然体験活動を言い表す最も一般的な用語が「野外教育」であると考えられる。そして、その中でも、参加者の中に「冒険」の感覚を生み出す一定の危険やリスクを伴う自然体験活動を言い表す用語として「冒険教育」が存在していることがわかる。

３．財団法人日本アウトワード・バウンド協会の活動と理念

財団法人日本アウトワード・バウンド協会（以後ＯＢＳと略記する）は、イギリスを発祥地として世界的に発展してきた冒険教育機関アウトワード・バウンド・スクールのわが国における支部機関である。

現在世界の二十数カ国に展開しているアウトワード・バウンド・スクールは、ドイツ生まれの教育学者クルト・ハーン（Kurt Hahn）によって1941年に設立された。ハーンは、現代的で便利な生活が引き起こす身体能力や生活技能の低下、自己規律や他者への思いやりの喪失、そして、傍観者主義の浸透による積極性や冒険心の衰退を現代の人間の問題として捉え、それらを克服するための様々な冒険教育の活動を展開した。アウトワード・バウンドという用語は、一般的には「外国行きの、外航の」を意味するが、イギリスでは出航24時間前の船が船尾に掲げる旗を指し、その船が出航の最終準備段階にあることを意味するという[5]。つまり、船が安全な陸地を離れ、世界のどの大陸にも通じているという点では開放的だが、時には生命の危機にさえ直面するかもしれないという点で危険と困難の待ち受ける、広大な外海に乗り出していくことを意味しているのである。この命名はアウトワード・バウンド・スクールの理念を象徴的に表しているが、その背景には、アウトワード・バウンド・スクールの設立に至る過程で、ハーンが勤務していた学校で洋上訓練や海難救助など海に関する活動を行っていたことが関係していると考えられる。現在では、海に関する活動だけではなく、登山やロック・クライミングなど、山に関する活動も活発に行われている。

わが国のＯＢＳは、1989（平成元）年に長野県北安曇郡小谷村に開校され、2006（平成18）年１月に文部科学省より認可を受けて財団法人となった。ＯＢＳが主催するプログラムには、セルフ・ディスカバリー、ジュニア・アドベンチャー、指導者養成などのコースがある。セルフ・ディスカバリーコースは、16歳から36歳までを対象にした最短で３日間、最長で21日間の冒険教育のプログラムであり、具体的な内容は、登山、ロック・クライミングや沢登り、マウンテン・バイクでの遠征、キャンプなどである。ジュニア・アドベンチャーコースは、小学校３年生から中学校３年生までを対象にした５日間から７日間の冒険教育のプログラムであり、具体的な内容は、夏は登山、ロック・クライミングや沢登り、マウンテン・バイクでの遠征、冬は雪上キャンプ、スキーや雪山遠征などである。指導者養成コースは、18歳以上を対象にした、無雪期は69日間、積雪期は40日間の、野外教育・冒険教育の将来の指導者を養成するプログラムであり、様々な冒険活動の技術に加えて、冒険活動の指導法や野外救急法なども内容に含んでいる。この他には、37歳から60歳までを対象にした３日間のプログラムや、自然体験活動の指導者のためのリスクマネジメント・トレーニングなどを実施している。さらにＯＢＳは、学校を対象として、宿泊研修や修学旅行、部活動の合宿などで仲間どうしの信頼関係づくりや集団としての力の向上に貢献するプログラムを実施したり、企業を対象として、若手社員や幹部候補生の意欲や積極性を引き出すプログラムを実施したりしている[6]。

さて、このようなＯＢＳの活動と理念の特徴は、次の３点である。第１に、参加者が非日常的な時間と空間に身を置くことを活動の前提としている。家庭や地域、職場といった日常的な生活と労働の場を遠く離れ、ある程度、あるいは、相当程度の長期にわたって自然の直中に入り込んでこそ、そこでの活動に深い意味が生まれると考えられている。第２に、参加者には過酷と思えるほどの挑戦が課される。ＯＢＳのプログラムにおける自然との関わりは、自然体験活動と呼ばれるものをはるかに越えて、自然への挑戦であり自分自身の限界への挑戦でもある。第３に、参加者の自己発見・自己創造を重要なねらいとしている。これは既述の通り、ＯＢＳのコース名称にセルフ・ディスカバリーという用語が含まれていることからも理解される。つまり、参加者が非日常的な時間と空間に身を置き、過酷と思えるほどの自然や自分自身の限界への挑戦を通して、それまで気づかなかった自分の潜在的な力を発見したり、新たな自分の可能性に気づいていくことを目指しているのである。もちろん、ＯＢＳのプログラムにおいて、参加者相互の協力関係が軽視されているわけではないが、やはりそれ以前に、自分自身の非力さやひ弱さに直面せざるを得ない状況に参加者を追い込むことが、ＯＢＳのプログラムの大きな特徴である。このように、活動の文脈の非日常性、自然と自分自身の限界への挑戦、自己発見・自己創造を特徴とするＯＢＳのプログラムにおいて、「冒険」は文字通りの意味での冒険を言い表しており、冒険教育という用語が一般に意味すると考えられる活動が行われている。

４．株式会社プロジェクトアドベンチャージャパンの活動と理念

株式会社プロジェクトアドベンチャージャパン（以後ＰＡＪと略記する）は、アメリカのプロジェクト・アドベンチャー（Project Adventure, Inc.）との共同出資により、1995（平成７）年に設立された。本社所在地は東京都渋谷区である。ＰＡＪは、プロジェクト・アドベンチャーが開発した冒険教育プログラムの普及を主な目的とするが、ＯＢＳと同様に指導者の養成、学校や企業での研修なども行っている。後述するように、ＰＡＪはＯＢＳとは異なった理念に基づいて活動している団体であるが、実はプロジェクト・アドベンチャーは、アウトワード・バウンド・スクールから派生して生まれたものである。つまり、アウトワード・バウンド・スクールの冒険教育のプログラムを学校教育の中で利用しやすいように応用したのがプロジェクト・アドベンチャーのプログラムである。アメリカでプロジェクト・アドベンチャーが設立されたのは1971年であり、設立の中心人物は高等学校の校長であったペイ（Pieh, J.）である。ペイの父親は、アウトワード・バウンド・スクールのミネソタ校の創設者であったため、ペイはその活動と理念に親しんでいたが、そのプログラムの学校教育への応用を模索する過程で、学校からそれほど、あるいは、まったく離れずに、短期間または短時間で実施できるプログラムを構想することになったのである[7]。

ＰＡＪのプログラムでは、ローエレメントやハイエレメントと呼ばれる冒険コースを利用した活動が行われる。木材、ワイヤーやロープで構成されるエレメントは、参加者が知恵を出し合って協力しないとコースを通り抜けたり課題を解決したりできないように設置されており、膝から背丈くらいの高さに設置されたものをローエレメント、電柱やそれ以上の高さに設置されたものをハイエレメントという。ローエレメントは協力や課題解決を通して参加者相互の信頼関係を構築するために、ハイエレメントは参加者相互の信頼関係に基づいて、恐怖心の克服や日常生活では経験し難い達成感を得るために利用されることが多い。このエレメントは、木材に防腐処理を施して屋外に設置することもできるし、体育館などの室内に設置することもできる[8]。

ＰＡＪのプログラムではまた、指導者の一定のコントロールの下で、グループ・ダイナミックスやグループ・カウンセリングの考え方に基づく、アクティビティと呼ばれる活動が行われる。これには、エレメントを使用する場合もしない場合もある。アクティビティには様々なものがあるが、参加者が必然的に相互理解を深めたり信頼関係を築いたりしていけるような集団ゲーム的な活動が主な内容である。これも、エレメントを利用した活動と同様に、屋外でも室内でも実施可能である。

これらＰＡＪのプログラムの理念は、体験学習サイクル、フルバリュー・コントラクト、チャレンジ・バイ・チョイスという３つの用語で表現されている。体験学習サイクルとは、アクティビティを単なる活動で終わらせてしまうのではなく、活動を振り返る機会や身についた知識や技能を新しい状況に応用する機会を含む、一連の学びのサイクルの中にアクティビティを位置づけることを意味している。フルバリュー・コントラクトとは、仲間を非難したり軽視したりせず、その努力を最大限に評価することであり、チャレンジ・バイ・チョイスとは、参加者には挑戦が強制されるのではなく、挑戦を選択する自由が与えられることである。ただし、選択の自由といっても、活動からの身体的また心理的な離脱まで認められるわけではない。

さて、このようなＰＡＪの活動と理念の特徴は、次の３点である。第１に、参加者が非日常的な時間と空間だけではなく、日常的な時間と空間に身を置くことも活動の前提としている。屋外エレメントを利用する活動は、どちらかと言えば非日常に近い時間と空間で行われるが、室内エレメントを利用したり体育館や教室で行われる集団ゲーム的な活動は、どちらかと言えば日常に近い時間と空間で行われるものである。第２に、参加者には、一定の危険は伴うものの比較的安全な、しかも、選択の余地ある挑戦が課される。参加者の自発的な意志に基づく挑戦が尊重されるのである。第３に、参加者相互の関係づくりを重要なねらいとしている。活動への参加や挑戦を通した、他者理解や参加者相互の良好な関係づくりが目指されているのである。もちろん、ＰＡＪのプログラムにおいて、自分を変えたり新しく発見したりすることが軽視されているわけではないが、それもあくまで参加者相互の関係の

中で生起させようとすることが、ＰＡＪのプログラムの大きな特徴である。このように、活動の文脈の非日常性および日常性、自発的な意志に基づく挑戦、参加者相互の関係づくりを特徴とするＰＡＪのプログラムにおいて、「冒険」は比較的安全ではあるが文字通りの意味での「冒険」だけではなく、いわば心理的な意味での「冒険」をも言い表しており、冒険教育という用語が一般に意味すると考えられる活動よりも幅広い活動が行われている。

５．ＮＰＯ法人エー・ビー・シー野外教育センターのプログラムとアクティビティの特徴

ここまで見てきたように、現在のわが国において野外教育・冒険教育に関する２つの主要な団体と見なされるＯＢＳとＰＡＪは、それぞれ異なった理念に基づいて活動を行っている。ＯＢＳは、自然の中での文字通りの意味での「冒険」を通した「自己発見・自己創造」を重要なねらいとし、ＰＡＪは、屋外・室内を問わず、比較的安全ではあるが文字通りの意味での「冒険」だけではなく、心理的な意味での「冒険」をも通した「参加者相互の関係づくり」を重要なねらいとしている。ＯＢＳもＰＡＪも学校教育との関わりを持っていることは既に述べたが、特にＰＡＪのプログラムは、現代の子どもたちの自然体験の不足だけではなく、社会体験や人と関わる体験の不足によるコミュニケーション能力の低下を克服したり、自分に自信が持てないでいる子どもたちの自尊感情を醸成したりするためのプログラムとしても、学校教育の一部に徐々に浸透し始めている。以下では、独自の問題意識に基づいて設立され、その後、ＯＢＳとＰＡＪの理念に触発されながら野外教育・冒険教育の活動を続けているＮＰＯ法人エー・ビー・シー野外教育センター（以後ＡＢＣと略記する）を事例として、具体的なプログラムとアクティビティの特徴を見ていくことにする。

大分市に本部を置き、杵築市に活動拠点を持つＡＢＣは、2001（平成13）年７月に、青少年の健全育成、社会教育の推進、国際理解の促進を目的として設立された。国際理解の促進が目的に含まれているのは、特に異文化や異なった生活習慣を持つ他者との日本の子どもたちのコミュニケーション能力の不足が、ＡＢＣ設立に向けた関係者たちの当初の問題意識の一つであったためである。ＡＢＣは現在、子どもキャンプの実施、地域のジュニア・リーダーやシニア・リーダーの育成、地域教育活性化のためのワークショップの開催など、野外教育をベースにしながら幅広く活動を展開している。ＡＢＣは、ＯＢＳとの共通点を持ちながらも、どちらかと言えばＰＡＪとの共通点をより多く持ちつつ活動している団体である。

１）プログラムの内容と特徴

ＡＢＣの活動には、プログラムという単位と、アクティビティという単位がある。プログラムとは、数時間から数日間、場合によっては１年間などの長期にわたる活動のことであり、アクティビティとは、プログラムの具体的な内容となる一つひとつの活動のことである。具体的なアクティビティについては後述するが、ここではまず、プログラムの一例として、中学生の海外体験研修プログラムを取り上げる。このプログラムは2005（平成17）年度と2006（平成18）年度に、大分市教育委員会がＡＢＣに実施を委託したものである。市教委が中学２年生を対象に参加者を募集し、小論文と面接により選ばれた20名が参加した。研修先はオーストラリアで、現地での本研修の期間は夏季休業中の３週間であった。それとは別に、日本国内において事前と事後の研修をそれぞれ５回程度行った[9]。

このプログラムの本研修で中学生たちは、視界いっぱいに広がる地平線を眺めたりホエール・ウォッチングをしたり、オーストラリアにしか生息しないカンガルーやコアラと触れ合ったりするなど、現地の広大な自然に触れることになった。そして、そのオーストラリアの広大な自然の中で、日本での日常の生活では経験できないような体験をすることができた。ファームステイをした農家・牧場での乗馬体験や、入り江や湖でのカヌー体験、エレメントの設置された野外教育施設での体験など、自然の中での様々な活動に取り組んだ。さらに、オーストラリアという、言葉も自分なりの常識も思うように通用しない異文化や、生活様式の異なる人々との出会いによって、自分の世界観や人生観を編み直す機会を得ることにもなった。宿泊は、現地のどこにでもある家庭でのホームステイを基本としていたから、家の間取り、食事の内容、生活習慣などを間近で見ることにより、その編み直しはより具体的

なものであったと考えられる。それと同時に中学生たちは、自分の住む日本という国や自分の普段の生活の場を顧みることになった。つまり、オーストラリアでの異文化体験が、世界観を拡大するのと同時に、自分の母国や自分の日頃の生活を振り返る契機となったのである。

また、事前の研修では、仲間との関係の大切さと、何事にも挑戦することの大切さについての認識を深める機会を得ることになった。異なる学校から集まり、当初はまとまりのなかった中学生たちが、まずは、存在を認め合い自分の殻を破って自己表出していくアクティビティによって少しずつ打ち解けていった。さらに、チームワークと仲間どうしの十分な意思疎通が必要なエレメントを使用したアクティビティや、７メートルほどの高さのクライミング・ウォールに仲間が支える命綱を付けてよじ登るアクティビティなどを通して、相互理解を深め、信頼関係と協力関係を築いていった。事前の研修におけるこれらの経験は、本研修での広大な自然や異文化との出会いにおける衝突や葛藤の場面で生かされることになった。自分たちの経験を振り返り、その意味を他者に伝える事後の研修においても、それは生かされた。

このように、実際のプログラムには、いくつかの要素が含まれていることがわかる。本研修での活動には、広大な自然との接触や野外教育施設での体験など、典型的に野外教育と呼べる活動があり、乗馬体験やカヌー体験のように、スリルを味わえるという意味で冒険と呼べる活動があり、そして、何よりもオーストラリアでの異文化体験がある。また、事前と事後の研修においては、仲間との関係づくりのための集団ゲーム的な活動が行われている。これは、ＯＢＳのような冒険教育の要素と、ＰＡＪのような野外教育をベースにした仲間との関係づくりの要素が、同時に含まれているプログラムの一例と言えるだろう。

２）アクティビティの内容と特徴

次に、ＡＢＣのアクティビティの内容と特徴を見ていくことにする。ここで取り上げるアクティビティは、ＰＡＪのアクティビティとよく似たものであり、この中のいくつかは、前述の中学生の海外体験研修プログラムの事前と事後の研修においても実施されたものである。従来のレクリエーションなどで行われる活動と比較すると、ＡＢＣのアクティビティには次の３つの特徴がある。第１に、集団ゲーム的な活動における勝ち負けが、単純な意味での勝負や競争に留まらない要素を含んでいる。第２に、誰かが命令して、他の誰かがそれに服従するという「命令－服従関係」がない。第３に、自分自身の個性や特徴への気づきを通して、仲間の個性や特徴、仲間との関わりについて学んでいく機会が用意されている。これらのアクティビティは雨天時などには室内で行うこともできるが、活動環境の開放感や身体を活発に動かすことの爽快感の点で、やはり屋外で行う方が効果的である[10]。

①　第１の特徴を持つアクティビティ

「ハッピーあいこ」というアクティビティがある。通常のじゃんけんは勝ち負けを決めるために行われるが、「ハッピーあいこ」でのじゃんけんは２人組のペアを作るために行われる。つまり、２人の参加者が互いに出した手の形が違うとき、勝ち負けが決まるのではなく、ペアの不成立を意味するのである。ペアが成立するためには、通常のじゃんけんでの「あいこ」にならなければならない。通常の「あいこ」はそこで決着するのではなく、勝ち負けが決まるまで繰り返されるが、「ハッピーあいこ」では「あいこ」がペアの決定として決着する形なのである。

この「ハッピーあいこ」では、勝ち負けを決めるためのものという通常のじゃんけんの性質が、いわば相対化されている。すなわち、じゃんけんは勝ち負けを決めるためのものという参加者の固定観念を揺さぶり、多くの人にとって珍しくもないじゃんけんの、新たな利用可能性に目を向けさせる働きをこのアクティビティは持っているのである。また、参加者にとってペアを組むことになるのは、勝ち負けで分類されたのではなく、同じ手の形を出した相手なのであり、息の合った仲間という意識も強まることになる。ペアが決まるまで、他の多くの参加者とじゃんけんを繰り返していくことも、特に初対面の他の参加者と気軽な活動を通して早く親しんでいくきっかけとなる。

「アイ・ゴッチュー」というアクティビティにおいても、勝ち負けは単純な勝ち負けではなくなっている。これはまず、参加者全員を２つのチームに分け、アクティビティの２人の指導者が両者の間にブルーシート

を肩の高さまで持ち上げて仕切りを作る。両チームのメンバーは、相手チームから見られないように、ブルーシートを挟んで相手チームと一列に正対して座る。列の先頭に誰が座るかは、その都度決める。この状態で、指導者がシートを引き下げると、両チームの先頭のメンバーが対面することになる。ここで先に相手の名前を言うことができた人の勝ちで、負けた人は相手チームに移動して引き続き活動に参加する。これを繰り返しながら、最初は２つに分かれていたチームが、最後に１つのチームとなったところでアクティビティは終了する。

「アイ・ゴッチュー」においては、楽しみながらメンバーの名前を覚えられることはもちろん、仮に自分が負けたとしても、それは相手が自分の名前を覚えていて、いち早く自分の名前を呼んでくれたからであるという、ある種のうれしさも経験することになる。これは、負けに伴う単純な悔しさや敗北感とは異なるものである。また、活動の最中にチーム間のメンバー移動が頻繁に起こるため、敵と味方も絶対的に固定的なものではなく、相対的で流動的なものであることを参加者は経験することになる。最後に、大きな１つのチームができてアクティビティが終了するのも、２つのチームの間での勝負や競争の通常の結末とは異なっている。

②　第２の特徴を持つアクティビティ

「フラフープ・チャレンジ」というアクティビティがある。まず、参加者全員で両隣の人と両手を繋ぎ、一つの大きな円を作る。この円の中に１本のフラフープを通す。その後は活動が終わるまで両隣の人の手を離すことはできない。そして、参加者一人ひとりが両隣の人と両手を繋いだままの状態で、首や腕や脚を動かすことによってフラフープを移動させていく。１周回ったところで終了となるが、それまでに要した時間を計る。自分たちの記録をもとに、自分たちで達成したい目標時間を設定し、その解決のためにどのような工夫ができるかを全員で話し合い、実践していく。これを繰り返しながら、自分たちで目標を立てることの大切さと、それを達成する喜びを体験していくというアクティビティである。

このアクティビティにおいては、他のレクリエーション関係のゲームで時折見られるような、参加者の間での命令－服従関係は存在しない。目標は誰かに命令されたものではなく、自分たちで決めたものである。成功は更なる挑戦を生み、失敗は一層の工夫や話し合いを生む。その過程において、誰もがリーダーとなり得るし、誰もがフォロアーとなり得る。全員で手を繋ぐというスキンシップが参加者相互の親近感を増し、集団としての凝集性を高めるのも、このアクティビティの特徴である。

「スパイダー・ウェブ」というアクティビティも同じ特徴を持っている（写真１，２）。まず、屋外で木々の間の空間を活用して、ゴムひもやロープなどで人が通るくらいの穴で構成された巨大な蜘蛛の巣を作る。一つの穴は一度しか使えないという条件を付けた上で、全員が巣の向こう側へくぐり抜けることを目標とする。許容される蜘蛛の巣への接触回数もチームで設定し、それを超過すると、最初からやり直しとなる。

写真１（スパイダー・ウェブ）

写真２（同上）

このアクティビティにおいては、目標は明確だが、目標に到達する過程で出会う問題解決の仕方は、参加者に委ねられている。フラフープ・チャレンジと同様に、全員に発言の機会があり、実地に試すことによって自分たちの考えが検証されていく。また、このアクティビティでは、目標を達成するために自分の身体を仲間に委ねたり、自分に委ねられた仲間の身体をしっかりと支えたりする場面が生まれる。支えたり支えられたりという関係を、身をもって経験することになるのである。

③　第３の特徴を持つアクティビティ

「カテゴリー」というアクティビティがある。これは、参加者全員の中から、提示された条件に合う仲間を探し出すアクティビティである。例えば、「ペットを飼うなら犬か猫か」「ふりかけと言えば何が好きか」などの条件に合うように、参加者相互のコミュニケーションを取りながら、自分たちでグループ分けを繰り返していくのである。

このアクティビティでは、自分と共通の基盤を持った人との予想内あるいは予想外の出会いを楽しむことができる。また、自分にとっては当たり前のことが、他者にとっては当たり前ではなかったりするという現実を経験することによって、他者の個性や特徴を理解するだけではなく、自分の個性や特徴を改めて認識する機会ともなるのである。

「クライミング・ウォール」というアクティビティでは、もう少し危険で冒険的な条件の下で、個人と集団の関係のあり方を経験することができる（写真３，４）。このアクティビティでは、登山家がロック・クライミングの練習に用いる施設とほぼ同様のものを使用する。壁には一面に、岩に見立てたホールドが接着されている。自分なりの目標を設定し、そこに向かって壁をよじ登っていくというものである。安全のために命綱を繋留するが、両手足に自分の全体重がかかり、高さもかなりのものになるので、本人にとっては、大きな不安や恐怖と戦うことになる。チームメイトにもそれぞれ役割を担わせ、仲間の安全と挑戦を支えていることを自覚させる。時には、命綱の操作を教え、仲間の身体と生命を支える体験として活用することもある。チームメイトは、挑戦中の仲間の目標を共有して、応援や助言を行い、チームが一致団結して挑戦するようにする。チームの全員が一度は、クライマーの立場を経験するようにすることで、より親近感が生まれ、緊密な協力と連携ができるようになる。

写真３（クライミング・ウォール）

写真４（同上）

このアクティビティで参加者は、自分の目標が仲間やチームのものでもあり、仲間やチームの目標が自分のものでもあるという関係を経験することになる。個人の目標がいつしか全体の目標として統合･共有され、チームが一体となった雰囲気を作り出す。クライマーは、自分との葛藤や自分自身への挑戦が促されることにより、チャレンジ精神や達成感を経験することができる。クライマーを支える仲間は、しっかりと応援や助言をすることによって、思いやりや責任などについて学ぶ機会となるのである。

このように、アクティビティと呼ばれる活動は、文字通りの意味での冒険的要素も一部に含みながら、主

に仲間どうしの関係づくりに役立つものとなっている。

６．まとめと課題

既述の通り、現在のわが国における野外教育・冒険教育には、大きく二つの型がある。一つは、ＯＢＳのように、文字通りの意味での野外教育・冒険教育を徹底していくものであり、もう一つは、ＰＡＪのように、「冒険」の意味を心理的なものにまで拡大することによって、現代の子どもたちの問題に対応する学校教育への応用を図るものである。ＡＢＣは、独自の問題意識に基づいて設立され活動してきた団体であるが、活動の目的によって強弱の違いは生じるものの、ＯＢＳの特徴とＰＡＪの特徴を併せ持った団体である。ＡＢＣに限らず、現存するこの種の団体は、多かれ少なかれＯＢＳとＰＡＪの影響を受けつつ活動していると考えられる。

野外教育・冒険教育の今後の課題として指摘できるのは、次の３点である。第１に、グループ・ダイナミックスやグループ・カウンセリングなどの手法を応用したプログラムの問題である。野外教育をベースにした集団ゲーム的な活動が、学校教育の文脈において比較的容易に実施可能であり、仲間どうしの関係づくりに役立つものであることは、正当に評価されるべきである。しかし、実施の容易さを重視するあまり、屋外から室内へと活動の場を無限定に移していくことは、野外教育・冒険教育の本来の理念を薄めることにもなりかねない。実際に、メンテナンスも容易である室内エレメントによるアクティビティは、天候に左右されずに実施可能であるという利点はあるものの、それだけを見れば、きわめて特殊な形態の「冒険教育」と言わなければならない。また、集団ゲーム的な活動がいかに切実な必要感を参加者の中に生み出しているとしても、それはあくまで指導者による一定のコントロールの下でのことである。擬似的な文脈ではなく、現実の文脈での活動との関連づけが常に意識される必要がある。

第２に、社会教育としての野外教育・冒険教育と学校教育との連携の問題である。従来、社会教育と学校教育は、異なるカテゴリーとして捉えられることが多かった。しかし、本稿で見てきたように、学校、地方自治体、青少年教育施設が主催する各種のプログラムに、本来は社会教育に携わる民間団体が協力したり貢献したりする機会は、自然体験活動や体験的な学習を重視する時代背景の中で、増加していくと考えられる。それにも関わらず、特に学校教育の側に、社会教育や生涯学習の領域で蓄積されてきたノウハウを活用する準備が依然として不十分である。両者にどのような連携の仕方があり、子どもや若者たちの教育にどのような貢献が可能なのか、実践的な検討が必要である。

第３に、野外教育・冒険教育の指導者の養成の問題である。徹底した野外教育・冒険教育であれ、学校教育へと応用されたそれであれ、プログラムを適切に実施するには、豊富な経験と十分な力量を持った指導者の存在が不可欠である。これは、野外活動や冒険活動における危機管理の問題だけではなく、特に学校教育に応用可能なプログラムの普及を考える際にも、重要になってくる。学校教育に応用可能なプログラムであれば、学校の教員がそれを実施するということも現実にはあり得ることであり、教員の中にそのような知識と技術を持つ者がいれば、その種のプログラムはより円滑に実施されることになる。実際に、本稿で見てきたような集団ゲーム的な活動は学校教育において、仲間との関係づくりだけではなく、心の教育や自尊感情の醸成という観点からも注目されている。また、それら集団ゲーム的な活動は、ある特定の心理的状況を参加者の中に作り出すという意味での心理的コントロールを含むものでもあるので、教員であっても指導者には、適切で十分な訓練が必要である。

今後は、このような野外教育・冒険教育の成果の評価方法の開発や、野外教育・冒険教育の学校教育への応用の可能性の検討、そして、欧米の野外教育・冒険教育の実態の調査も視野に入れて、研究を進めたい。

注

1　文部科学省ウェブサイト
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701.htm

2　斉藤仲次（1968）『野外教育：楽しいデイ・キャンプ』明治図書、江橋慎四郎（1964）『野外教育』体育の科学社、など。

3　Donaldson, G.E. and Donaldson, L.E. (1958) Outdoor Education: A Definition. Journal of Health,

Physical Education, Recreation, and Dance.

4　Ford, Phyllis (1992) Outdoor Education. In Marvin C. Alkin (ed.) *Encyclopedia of Educational Research, sixth edition*, Macmillan, pp.963-967.

5　ＯＢＳウェブサイト
http://www.obs-japan.org/index.html

6　コース名称、対象者や実施期間は2006（平成18）年９月現在のものである。ＯＢＳウェブサイト
http://www.obs-japan.org/index/html

7　ディック・プラウティ、ジム・ショーエル、ポール・ラドクリフ（1997）『アドベンチャーグループカウンセリングの実践』伊藤稔（監訳）、みくに出版、3-4頁。

8　実際に、いくつかの地方自治体の施設、青少年教育施設、大学を含む学校などでは、屋外エレメントだけではなく室内エレメントも設置されている。ＰＡＪウェブサイト
http://www.pajapan.com/course/course-02.html

9　2005（平成17）年度のこの事業の報告書として、次の文書が公刊されている。大分市教育委員会学校教育部青少年課（2006）「平成17年度大分市中学生海外体験研修事業～国際性の涵養とジュニアリーダー育成に向けて～」。また、本稿執筆者のうち洲崎が、事前研修の一部に指導者として参加した。

10　アクティビティの特徴に関するここでの記述は、本稿執筆者のうち伊藤と洲崎が、2004（平成16）年５月９日に住吉浜リゾートパーク（杵築市）で開催されたＡＢＣのアクティビティ体験プログラムに、大学生13名とともに参加者として参加した経験の反省的な振り返りに基づくものである。プログラム終了後に、参加者全員でプログラムにおける自分たちの経験を意味づけるための話し合いを行い、その後、その結果を参考にしつつ伊藤と洲崎がそれぞれの所見を擦り合わせることを通して、記述したものである。したがって、これらの記述は、質問紙調査や観察などによって参加者の経験を外側から捉えたというよりも、参加者自身がその経験を内側から捉えたというべきものであることを断っておきたい。また、文中の写真は、執筆者らが参加したプログラムではなく、小中学生を対象とした同様の内容のプログラムにおけるアクティビティの様子を撮影したものである。